

アーミッシュ創始者ヤコブ・アマンの軌跡

大 河 原 眞 美

A Footpath of Jacob Ammann, the Founder of the Amish Religion

Mami Hiraike OKAWARA

1、はじめに

宗派の創始者は、その偉業が称えられるのが一般的である。しかしながら、現代アメリカで18世紀の生活様式を堅持しているアーミッシュの場合、その創始者のヤコブ・アマンについては、アーミッシュの間で崇められず、関心も持たれていない。

アーミッシュは、ヤコブ・アマンの提唱により1693年に再洗礼派のメノナイトから分立した宗派である。再洗礼派は、世俗的なものの「忌避」を強く主張し、自分の意志でキリストの教えに従うことを旨として幼児洗礼を拒否し、再洗礼派以外の者との宗教的交流を穢れるとして禁止していたため、異端の宗教とされていた。再洗礼派に対する厳しい迫害のなか、救いの手を差し伸べる非再洗礼派の者に対して聖餐式の参加を認める等の信者として扱う動きがメノナイトに出てきた。ヤコブ・アマンは、これに異を唱えてアーミッシュを分立し、アーミッシュという名称もアマンの名前に由来している。

アーミッシュの分立にあたって、ヤコブ・アマンは、メノナイトの聖職者のハンス・ライストと「忌避」の解釈を巡り、激しい論争を繰り広げている。そして、アメリカに渡ったアーミッシュも、「忌避」の解釈を巡って、旧派アーミッシュ、新派アーミッシュ、ビーチー・アーミッシュと分派を繰り広げている。

ヤコブ・アマンの生涯についての研究は、マックグラス（William R. McGrath）の *The Mystery of Jacob Amman*（Amish Mennonite Publications, 1989）があり、マックグラス自身は、ヤコブ・アマンの生地とされるスイスのジメンタール地方、後に再洗礼派の活動が行なわれたスイスのエメンタール（Emmental）地方、フランスのアルザス地方で古文書からの調査を行い、さらに、ヤコブ・アマンはアメリカで没したという仮説に基づいてノース・カロライナ州にも行って調査をしている。しかしながら、アーミッシュ関連の主要な研究文献¹に、マックグラス研究の引用はない。ヨーロッパでのヤコブ・アマンの生涯

1 *The Mennonite Encyclopedia* (1990)、*Amish Society* (1993)、*A History of the Amish* (2015)、*The Amish* (2013) など。

について、マックグラスの調査結果と同様の内容が簡潔に言及されているにすぎない。マックグラスの仮説の域を超えないアメリカ移住については全く触れられていない。

本論では、ヤコブ・アマンの生涯について、マックグラス研究を中心にまとめて、ヤコブ・アマンの軌跡として紹介する。マックグラス研究の資料入手の経緯について紹介して、後の研究で確認ができるように整理したい。

2、ヤコブ・アマンの生年月日と生地

ヤコブ・アマンがいつどこで生まれ、いつどこで死んだかについて正式の記録が残っていない。アメリカに渡ったアーミッシュは人口も増加し隆盛を極めているのに、当のアーミッシュはヤコブ・アマン個人に関心がないのである。後述するが、ヤコブ・アマンは生まれながらの再洗礼派でなく改革派からの改宗者であったこと、1693年にアーミッシュを創設したが1712年以降はその消息が不明であること、また、アマンの姓名を持つ者がアーミッシュの中にほとんどいないことによるようである。

(1) アマンの綴り

アマンという苗字は、スイスによくみられる苗字である。一般的にはAmmannと綴られる。スイス連邦大統領のベルン州出身のヨハン・シュナイダー＝アマンもJohann Niklaus Schneider-Ammannという綴りで、ベルン州に多い苗字である。

一方、アーミッシュに多い苗字は、ヨーダー（Yoder）、ミラー（Miller）、ホステラー（Hostetler）などであるが、Ammannはない。この理由として、Ammannを名乗る人々は再洗礼派でなく改革派（Reformed Church）で、ヤコブ・アマンは改革派から改宗して再洗礼派になったため（Hostetler（1993）：44）、再洗礼派にアマンの苗字がない。ヤコブ・アマンの親族がアマンに共鳴してアーミッシュになっていれば、アマンという苗字は増えていたと思われる。実際は、再洗礼派であった娘もアマンの死後に改革派に改宗していることから、ヤコブ・アマンの教えに従った親族が少なかったため、アマンという苗字がアーミッシュにほとんど存在していないようである。

ヤコブ・アマンのアマンの綴りは、Ammannが一般的に用いられている（Hostetler（1993）、Roth（2002））が、Ammanもある（McGrath（1989））。後述するが、ヤコブ・アマンの生地とされるスイスのベルン州のエアレンバッハ（Erlenbach）の教会の公文書では、Ammanという綴りで書かれているが、ヤコブ・アマンの弟とされるウーリッチ・アマン（Ulrich Ammann）（Gascho（1937）：244）は、一貫してAmmannの綴りを用いている（Gratz（1951）：139）。公文書の綴りは実際に当人が使用していた綴りより行政が正当と判断する綴りが用いられることが多い。本論では公文書の綴りではなく、ウーリッチ・アマンが使っていたAmmannを使用する。

ヤコブ・アマン本人はどういう綴りを使っていたかを見ると、一貫性のない綴りを使っていたようである。当時の一般人は自分の名前を書くことができなかったので綴りが変わ

ることは珍しいことではない。ヤコブ・アマンの場合、1701年の文書にはi.Amme、1703年のはJacob Amen、1708年のはJacob ami、1709年のはiAとなっている（Hostetler（1993）：45-46）。ヤコブ・アマン本人が使っていた正式の綴りはないということである。

(2) アマンの生年時期

ヤコブ・アマンの生年については1644年生まれが通説である。1656年生まれの可能性もある。

ア、1644年生まれのヤコブ・アマン

マクグラスは、アマンの生年月日について、エアレンバッハ村の古文書館で二人のヤコブ・アマンの名前を見つけている。一人は1615年生まれで、もう一人は1644年生まれである。1615年生まれの場合アーミッシュの分派の1693年時に78歳、1644年生まれの場合は49歳となる。アーミッシュ分派にあたって、スイス再洗礼派のハンス・ライストとの激しい議論の応酬を考えると、1644年生まれの若い方のヤコブ・アマンがアーミッシュを起こしたヤコブ・アマンと考えてよいとしている。

ベルン州古文書館の1730年の文書にヤコブ・アマンという人物について記載があった（McGrath（1989）：8-10）。ヤコブ・アマンはトゥーン（Thun）の南のジメンタール谷（Simmental Valley）エアレンバッハ（Erlenbach）近くの生まれで、再洗礼派の長老であったと記されている。1730年4月12日のヤコブ・アマンの娘の話として、父親のヤコブ・アマンは国外で死んだとある。

この1644年生まれのヤコブ・アマンの父親はミヒャエル・アマン（Michel Amman）、母親については旧姓で記載されており、アナ・ルッペン（Anna Ruppen）²とある。ヤコブ・アマンは1644年2月12日に洗礼を受けた。

メノナイトを中心とする再洗礼派の百科事典である*Mennonite Encyclopedia*の「Jakob Ammann」でも、1644年2月12日の生まれのヤコブ・アマンがアーミッシュを結成したヤコブ・アマンであろうと記載されている。

イ、1656年生まれのヤコブ・アマン

ホステラーは、1644年生まれのヤコブ・アマンが古文書から最も有力であるとしながらも、1656年生まれの可能性についても言及している（Hostetler（1993）：41-2）。1975年のチューリッヒのあるアマン家の家系についての文献によると、ヤコブ・アマンという者が1656年2月19日に生まれている。このヤコブ・アマンは、ヤコブ・アマン（Jacob Ammann）とカトリーナ・アマン（Katharina）（旧姓 ローエンバーガー（Leuenberger））の三男で幼児洗礼を受けている。このアマン家は、ベルン州のマディスヴィル（Madiswill）のスタインガッセ（Steingasse）の農家である。マディスヴィルは、再洗礼派の多い地域であった。このヤコブ・アマンの結婚や死亡の時期についての記

2 古文書記載の綴りはRuppとなっていたが、記入ミスようである（McGrath（1989）：10）。

録はないが、マデイスヴィルから突然姿を消したとある。

ホステトラーは、1656年生まれであるならば、アーミッシュ分派時の1693年には37歳となり、ハンス・ライストがアマンのことを若造と言ったこととも頷けると述べている。17世紀当時、再洗礼派は犯罪者のように見なされていたため、追われるように生地を去り、また、結婚や死亡時期が不明なものもありうるとしている（Hostetler（1993：42））。

1656年生まれのヤコブ・アマンは子孫保有の系図以外に記録がない。一方、1644年生まれのヤコブ・アマンは、後述するが、官憲の家族等に対する威圧的な取締目的の接触等の公文書の記録もある。ハンス・ライストの生年月日も定かではないため、アーミッシュ分派時に1644年生まれのヤコブ・アマンの49歳という年齢でもハンス・ライストより若かった可能性もある。実年齢が若くなくても、白熱した議論で生まれながらでなく、改宗した信徒に対してその教義の理解の低さを象徴的に表すために「若造」と呼んだとしても不思議ではない。

本稿でも、ヤコブ・アマンは1644年にベルン州のジメンタール谷エアレンバッハ近くで生まれ、1644年2月12日に幼児洗礼を受けたとする。再洗礼派になったのは、1679年のようである（Huppi（2000：333））。

3、ヤコブ・アマンの宗教的背景

ヤコブ・アマンが再洗礼派の家に生まれたか、あるいはベルン地方の主流の改革派教会（Reformed Church）の家に生まれ、後に改宗により再洗礼派になったかは、アーミッシュの分立を考える上で重要な点である。特定の宗教の帰属意識が希薄な日本人の多くには理解が困難なことであるが、改宗によりある宗教を信仰することになった人は、生まれながら、また代々その宗教を信仰している家系の信徒から低く見られる傾向がある。ヤコブ・アマンの厳格な忌避の実践についてのハンス・ライストとの激しい議論の応酬は、ヤコブ・アマンが改宗者であったために、より反動的になり、より厳格な教義の実践を主張したと見られている（Hostetler（1993）、Nolt（2015））。また、ハンス・ライストがヤコブ・アマンに対して「若造」と言ったのは、生物学的年齢よりも教義の理解の青臭さという意味であろうという解釈がアマンの1693年11月22日付けの書簡から指摘されている（Huppi（2000：335））。

前述のように、ヤコブ・アマンは1644年2月12日に洗礼を受けた。洗礼を受けたということから、ヤコブ・アマンは、再洗礼派の家庭ではなく改革派教会（Reformed Church）の家庭出身である。

また、ヤコブ・アマンの娘であるが、ヤコブ・アマンの死後、改革派教会に入っているが、ベルン州が教父（godfather）のように受洗を保証するような役割をしていることから、ヤコブ・アマンの家がもともと改革派であったことの証としてみられている（McGrath（1989：11））。

さらに、エアレンバッハ村の古文書によると、ヤコブ・アマンの両親のミヒャエル・アマンとアナ・ルッペンは、1688年5月4日に官憲に再洗礼派か否かを問い質されている。1688年のヤコブ・アマンは44歳の再洗礼派の聖職者ということになるので、当時犯罪者のように取り締まられていた宗教に改宗した息子の親が、親も同じく改宗したのではないかと、その宗教的背景を問い質されることは不思議ではない（McGrath（1989：11））。

1693年7月9日にも、また、ミヒャエル・アマンとその娘のキャサリンは、改革派教会の聖餐式に行かなかったことを咎められ、次の聖餐式に不参加の場合は再洗礼派とみなして処罰すると言われたとある。このことも、ヤコブ・アマンが改革派出身で、改宗により再洗礼派になったことの根拠とされている（McGrath（1989：11）、Gratz（1951：137））。

4、1712年までのヤコブ・アマンの足跡

(1) エアレンバッハ追放後

再洗礼派に改宗したことによりヤコブ・アマンはエアレンバッハを追放されることになったが、アルザス地方に行くまで、ベルン州の別の地域に移っている。ボヴィル（Bowil）説とオーバーホーフエン（Oberhofen）説とシュテフィスブルグ（Steffisburg）説がある。

ア、ボヴィル（Bowil）説（（McGrath（1989）、Hostetler（1993））

ヤコブ・アマンは、再洗礼派に改宗後、生地のエアレンバッハを追われるようにして、エメンタール地方のボヴィル近辺のフリーダーズマット（Friedersmatt）に移った。ボヴィルはスイスのベルン州にある町で、当時、再洗礼派の信徒が多く住んでいた。エアレンバッハから30キロ北西にある。

ヤコブ・アマンが住んでいた家は現存している。アマンは、この地では再洗礼派の信徒として住んでいたが、1673年頃にボヴィルから、また追われるようにしてアルザス地方に移った。

イ、オーバーホーフエン（Oberhofen）説（Furner（2000）、Huppi（2000：329）、Nolt（2015））

ヤコブ・アマンは、ベルン州のオーバーホーフエンに住んでいた。1675年から1678年まで仕立て屋の見習いをしている時に、主人のヤコブ・ストドラー（Jacob Studler）の娘と思われるベレナ・ストドラー（Verena Studler）と結婚した。

1680年6月4日にエアレンバッハ出身のヤコブ・アマンは再洗礼派の教えを撒き散らしているとして、アマンにその行動をやめさせ、やめない場合にはベルン地域からの追放処分をするというやり取りをベルンとオーバーホーフエンの行政官との間で行われている（Furner（2000：326））。1693年12月13日に官憲から再洗礼派の指導者であるアマンの首には100ターラー（thaler）の賞金がかけてられていた（Huppi（2000：329））。

ウ、シュテフィスブルグ説（Baecher（2000：146））

1693年以前はシュテフィスブルグに住んでいて、ヤコブ・アマンがこの地にいる時に父親のミハエル・アマンが再洗礼派に改宗している。父親が、エアレンバッハで改宗しなかったのは、エアレンバッハの再洗礼派に不信感を持っていたからである（Baecher（2000：146））。

いずれの説をとっても、ヤコブ・アマンはエアレンバッハ、トゥーン（Thun）、その北部の地域であるベルン地方に住んでいたことは間違いない。

(2) アルザス地方

ヤコブ・アマンは、アルザス地方に1673年から1712年まで住んでいた。公文書によると、アルザスでのヤコブ・アマンは、仕立屋の職業についていた。父親のミハエルも仕立屋だった。幾ばくかの広さの土地と、乳牛を2頭、やぎを3匹所有していた。

ヤコブ・アマンは、1673年から1695年の20年間、平地のセレスト（Selestat）近くのハイドルスハイム（Heidolsheim）やオーネンハイム（Ohnenheim）のあたりに住んでいた。オーネンハイムには再洗礼派の信者が多く拠点のようで、人口の半数以上は再洗礼派であった。アマンはこの教区で入会を承認され、住まいは近くのハイドルスハイム（Baecher（2000：146））であった。1693年にはヤコブ・アマンの首には100ターラーの償金がかけられていた。父親のミハエルも一緒にいたようである。父親は1695年4月23日に死んだが、ハイドルスハイムは、カトリック教徒が優勢の地域だったため、土着の人間でもなく再洗礼派でもあるミハエルの埋葬は許されず、5キロ離れた隣村で埋葬に付した（Baecher（2000：146-147））。

アマンは、ボージュ山脈の山間の村のマルキルヒ（Markirch（現在のサント・マリー・オー・ミヌ（Saint-Marie-aux-Mines）））近辺のル・プティット・リブヴール（Le Petite Liepvre）に住み、再洗礼派の説教師や長老を務めていた。ル・プティット・リブヴールには、現在、ヤコブ・アマン通り（Rue Jacob Amman）という名前の通りがある。

アマンが住んでいたアルザス地方は、30年戦争により荒廃した土地が多く、農作業の能力の高い再洗礼派に耕作させて豊かにしようと、領主が再洗礼派の移住を促進していた。ベルン地方での迫害から逃れた再洗礼派が多く移住したが、移住者の多くは平地のハイドルスハイムやオーネンハイムに住むことを好み、マルキルヒに住む者は5分の1程度であった。

マルキルヒは、現在のフランス名のサント・マリー・オー・ミヌ（Saint-Marie-aux-Mines）という名が示すように鉱山の村であった。鉱山業が衰退した村には空き地があり、そこに再洗礼派の移住が促進された。ヤコブ・アマンは、父の死後にハイドルスハイムからマルキルヒに移ったようである。1694年から1696年の間に60家族の再洗礼派がマルキルヒに移住した。

アマンは、公文書の署名に、字が書けない旨の補足が係官により書かれていたので、字が書けなかったと考えてよい。字が読めたか否かについてかは不明である。しかし、人

心を捉える能力に長けており、1696年2月には自分の教区の再洗礼派の信者の兵役免除や徴税徴収の業務の免除を行政官にかけあって要求を通し、行政官からアマンは「新興再洗礼派の指導者」と評されている。しかし、後に村内で揉め事があっても仲裁に入ったという記録がないことから、ヤコブ・アマンの指導力は下がったという見解もある（Baecher（2000：156））。ヤコブ・アマンという者がアルザスの平地のバール（Barr）近辺で商取引をしていた記録があることから、ヤコブ・アマンがバールで隠居生活を送っていたのではないかという説がある（Baecher（2000：148））。そして、このヤコブ・アマンは £ 1200（現在の700万円程度）の資産を持っていたようである。ヤコブ・アマンがマルキルヒから追放された時、牛2頭とやぎ3匹しか所有しておらず、それを £ 45（26万円程度）で売却したという記録から、バールのヤコブ・アマンは別人の可能性もある。

ヤコブ・アマンがアルザス地方在住の記録³として1696年と1703年の再洗礼派名簿にヤコブ・アマンの名前があるが、1713年の再洗礼派名簿にはヤコブ・アマンの名前はない（Gratz（1951：137）（McGrath（1989：8）））。

当時の再洗礼派の長老の話によると、多くの再洗礼派は1712年のフランス国王ルイ14世のアルザス地域からの再洗礼派追放令により追放された。1723年の時点で再洗礼派の家族は14家族しか残っていなかった（McGrath（1989：8））。ヤコブ・アマンは1696年からマルキルヒに住んでいたが、1712年にアルザスを追放され、その後の行先ははっきりとしない。

（3）アマンの娘の証言

ヤコブ・アマンの娘は、1730年に、エアレンバッハから遠くないヴィミス（Wimmis）でベルン州が後見人のなるような形で4ターラーを払って改革派教会に入っている。その時に、娘は、父親のヤコブ・アマンはエアレンバッハ生まれで、再洗礼派の聖職者であったが、外国で死亡したとの記録（McGrath（1989：8））がある。ヤコブ・アマンは、1712年後の追放後から1730年までの間に、フランスを追放され、故郷のスイス以外のどこかの地で死んでいたことになる。

4、1712年以後のヤコブ・アマンの足跡

マクグラスは、ヤコブ・アマンは、アーミッシュのアメリカ移民の先導者としてペンシルバニアに渡り、そこからノース・カロライナに移り、先住民の襲撃を受けて死んだという仮説をたてている（McGrath（1989：81-99））。ヤコブ・アマンがヨーロッパで死んだとするならば、再洗礼派の指導者ということで死亡の記録が当然あるべきである。新天地のアメリカで先住民の襲撃による死亡なら記録がないころもありうるというのが、アメリカ死亡仮説の根拠である。下記にマクグラス説を記す。

3 再洗礼派の名簿はマルキルヒ近くのコルマー（Colmer）市古文書部に保管されているMcGrath（1989：8）。

(1) オランダからペンシルバニアへ

ヤコブ・アマンは1712年にアルザス地方から追放されてオランダに渡った。オランダのメノナイト・コミュニティと接触して、オランダのメノナイトが世俗化しているのに失望して、新天地を目指して、アーミッシュを率いて、1714年にペンシルバニアのバークス（Berks）郡に到着した。

(2) ペンシルバニアからノース・カロライナへ

18世紀にペンシルバニアに移住した白人で、ペンシルバニアでの定住が難しいと判断してノールカロライナなどに移住する者が多かった。アパラチア山脈伝いにペンシルバニアからバージニアを経てノース・カロライナに行くルートは、開拓者によって開かれていた。ノース・カロライナのヤドキン（Yadkin）川とユーハリ（Ewharrie River）が交差するあたりは肥沃な土地で、雉、兎、鹿などの野生の動物も多くいた。

1720年代の初めにペンシルバニアからノース・カロライナに移住したアーミッシュの家族が数世帯いる。それらの家族の間には、ヤコブ・アマンの息子が1730年にヨーロッパからペンシルバニアに移住し、後にノース・カロライナに向かい、おそらくは父親を探してだろうとの言い伝えがある。

(3) 先住民の襲撃

ヤコブ・アマンは、1720から1730年頃に、ノース・カロライナでアーミッシュのコミュニティを作った。しかし、1730年に先住民の襲撃を受けて、コミュニティは壊滅状態になった。1742年に、ダンカード・ブレズレン（Dunkard Brethren）と呼ばれる再洗礼派の教派のグループが、ペンシルバニアからアーミッシュのコミュニティのあった所にやってきた。先住民の襲撃で生き残ったアーミッシュは、このダンカード・ブレズレンの教会に所属するようになった。一部のアーミッシュは、ノース・カロライナ州ランドルフ（Randolf）郡あたりに住みついた。現在のランドルフ郡には、アマンの苗字から派生したと思われるオーマン（Auman）という名前が多く見られる。ヤコブ・アマンの子孫の可能性が高いが、教派はアーミッシュではない。

5、おわりに

アーミッシュの創始者のヤコブ・アマンは、生まれながらの再洗礼派ではなかった。スイスのベルン地方の改革派の家庭に生まれたが、再洗礼派の教えに共鳴をして改宗した。異端としてみなされていた再洗礼派のため、ベルンを追われアルザスに逃れた。しかし、メノナイトの再洗礼派の教義の実践が妥協的になったとして、厳格な再洗礼派の教義の実践を求めて、アーミッシュを分立した。

後に、アルザス地方で再洗礼派追放令が出され、オランダに向かった。しかし、オランダのメノナイトは、教義を厳格に実践していないとして、賛同するアーミッシュを率いて新天地のアメリカに渡った。アメリカでは、ペンシルバニアに入ったが、メノナイトが

既に定住して居を定めることが出来なかったために、ノース・カロライナで土地を開拓してアーミッシュの居住地を作った。しかし、先住民の襲撃を受け、その中でヤコブ・アマンは死んだ。ヨーロッパで殉教者として死ぬのであれば、記録が残るが、先住民の襲撃で死んだため、記録が残らなかったようである。

改宗による再洗礼派のヤコブ・アマンは、生まれながらの再洗礼派より厳格な教義の実践を主張し、アーミッシュを分立した。現在のアーミッシュの姓名のほとんどは、再洗礼派の苗字で、その中でアマンという改革派の苗字はほとんどない。生まれながらの再洗礼派でなく、その親族がアマンの教えを継承することがなかったことが、アーミッシュの間で、ヤコブ・アマン個人に対する崇めのような感情が強く出ないことの理由の可能性もある。今後のさらなる研究が待たれる分野でもある。

（おおかわら まみ・本学地域政策学部教授）

参考文献

- Baecher, Robert (2000) Research Note: The "Patriarche" of Sainte-Marie-aux-Mines, *Mennonite Quarterly Review* 74(1): 145-158. 閲覧日2017年11月4日
- Furner, Mark (2000), Research Note: On the Trail of Jacob Ammann, *Mennonite Quarterly Review* 74 (2): 326-328.
- Gascho, Milton (1937), The Amish Division of 1693-1697 in Switzerland and Alsace, *Mennonite Quarterly Review* 11 (4): 235-266.
- Gratz, Delbert (1951), Bibliographical and Research Note: The Home of Jacob Amman in Switzerland, *Mennonite Quarterly Review* 25 (2): 137-138.
- Hostetler, John (1993) *Amish Society* (4th ed), The John Hopkins University Press.
- Huppi, John (2000), Research Note: Identifying Jacob Ammann, *Mennonite Quarterly Review* 74 (2): 329-339.
- Kraybill, Donald, Karen M. Johnson-weiner & Steven Nolt (2013) *The Amish*, The Johns Hopkins University.
- McGrath, William (1989) *The Mystery of Jacob Amman* Amish Mennonite Publications.
- Nolt, Steven M. (2015) *A History of the Amish*, Third Edition, Good Books.
- Roth, John D. (2002) *Letters of the Amish Division* (2nd ed.), Mennonite Historical Society.
- The Mennonite Encyclopedia* (1990) Mennonite Brethren Publishing House.